

さくら



令和5年9月4日(月)

小さな命を救う



今年の7月17日、東京から大阪観光に来ていた女性が、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンを楽しんだあと、宿泊先のホテルに帰ろうとしていました。ホテルに向かう道すがら、どこからか猫の鳴き声が。しかし、周囲を見渡しても猫の姿は見えません。

その後、2時間たっても、姿は見えずに鳴き声だけが響いていました。心配になった女性は警察や消防に電話をすると、消防隊員が来てくれました。周囲を探索すると、子猫がビルとブロック塀の隙間に入って出られなくなっていました。消防隊員は子猫の救出を試みましたが、ブロック塀を壊さないと救出できないと判断し、女性に次のように伝えました。「自分で入ったのだから自分で出てくるでしょう」

女性もそのとおりだと思い、ホテルに帰りました。時刻は深夜になっていました。その日の正午にホテルをチェックアウト。子猫のいる場所に行くと、まだ鳴き声が聞こえました。何とかしなければならないと思った女性は、保護活動をしている団体に、片っ端に電話をかけました。そしてたどりついた保護団体が「ねこから目線。」

この団体には「猫を保護してほしい」という連絡がよくあるそうです。しかし、断るケースが多いとのこと。理由は、保護施設のキャパオーバー、そして保護した後は団体で何とかしてという通報者の無責任さにあるそうです。しかし、女性からの依頼は「救出を手伝ってほしい。救出後の面倒も見る」というものでした。

かくして「ねこから目線。」のスタッフにより、無事に子猫は救出されました。保護された子猫は体重100g、生後1週間ほど、おびただしい数のノミに寄生され手足には擦り傷。母猫が運ぶ途中で落としたのでしょうか。そのままでは助からなかった命です。その後、病院で治療を受けた子猫は、女性とともに東京に帰り、すくすくと育っています。

私が女性と同じ立場になったとしたら、これだけのことはできるでしょうか。とても自信はありません。小さな子猫の尊い命を救った、女性の善意に満ちた行動に敬意を表します。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

